
クロワッサンみたいな日々 ~夏~

Wonder Forest

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロワッサンみたいな日々～夏～

【NZード】

NO932Y

【作者名】

Wonder Forest

【あらすじ】

何時もどおりの日常に、少しスペースが入ったお話の一部目です。

「好きです。」

放課後の教室で少年は、少女に告げた。

だから俺は、黙つて自分の机に向かう。

鞄を取つて、教室を出る。ちゃんと防音を気遣つて扉を閉めてやる。

二人だけの世界に水を差す輩を入れる訳にはいくまい。

「ふう・・・。あいつ、千夏にホント、惚れてるなあ」

でもなんだか、放課後の教室で、想い人に告白するってのはいいなあ。

とか考えつつ、下校口を出る。

校門を目指していると、横から強い衝撃。

「 つー！」

びっくりして横に目をやると、先ほど青春をぶつけられていた少女、千夏が怒っていた。

「なんでおいていくかなっ！私、待つてたんだよー！？」

たしかに、俺が放課後に昨日やつていなかつた宿題を提出するから
帰つてると言つたのに、

待つてると言つた。しかし教室に戻ると、青春がお花畠していた。

つまり、俺は悪くない。

「悪いよー!?

最後のところは口に出したよつだつた。

「いや、青春のお邪魔虫になつてか。」

「外で待つてくれてもいいじゃんーー!..」

それも、さうか。

「・・・悪いたな。」

「もひ、分かればいいんだよつ」

そつぱつと、ひひつとしかめ面を綻ばせる。表情豊かな奴だ。

「ねー、帰りにクロワッサン買って帰るー。」

「昨日はチョコロロネ、その前はメロンパン、お前は放課後にパン
がないとだめなのか。」

ツツコミをこれておく。

「放課後にパンは絶対だよねー」

「だよねー」

3人目の声、青春をぶつけた張本人、日下部だ。

「今日で何敗目なん?」

「既に負け確定!?」

俺の質問に、本気で疑問がる日下部。お前3桁に届く勢いで、告白してゐるだろ。

今も忘れない。高校に入学して、自分のクラスはどこかと掲示板を見ている千夏にいきなりこいつは、

「好きです!! 貴方と結婚したいです!!」

バカかと思つた。

当然フられたが、めげずに千夏と仲良くなろうと俺に接近してきて、今日に至る。

回想終わり。

とりあえず、今日はいつものパン屋でクロワッサンを食つか・・・
正直クロワッサンはイマイチなんだよなあ。

あの味つて言つか・・・ときどきやたら焦げてるし・・・「好きです!!」「いや、日下部、わざの今で懲りないなお前」

あれ・・・今の女の声・・・？

ぽけっとしていたが、前に千夏とは別の女子。

隣の千夏と、田下部も驚いた顔。

「私が好きなのはーー田下部くんじゃなくて、英一郎くんですーー。」

少女は真っ赤にして叫ぶ。

「俺ですか・・・」

ていうか。誰ですか。

前編（後書き）

はじめまして、わんだーふぉれすとです。
こちらの作品は3編構成です。

俺の知らない人が、俺を好きだという。

どこかであつたかなあ・・・こんな可愛い人が知り合いだったら、俺が分からぬ訳はないのにな・・・。

「今日はそれが言いたくて・・・お返事はまだいらないです！」

そういうと、少女は慌てるように、走つて帰つてしまつ。

「・・・今の人、誰？英一郎」

「いや・・・俺に聞かれてもなあ・・・」

「二人とも知らないのか！？2年の立花先輩つて言えば男ならチエツクすべき女性だらう！？」

ほう、立花先輩か。記憶の中に面識はないんだがな。

「ねえ、立花先輩と付き合つの？」

「いや・・・知らない人と付き合つほど俺は、軟派じやないぞ。」「知つてたら、付き合つの？」

「それは、どうだらうな・・・」

「ふう一ん」

なんで俺のことなのに、千夏は不機嫌なのだろうか。

「まあいいや、
私帰るね。」

「いや、どうせ帰り道一緒だろ」

「いいのっ!!」

千夏は、俺たちを置いて早歩きで進んでいく。追いかけようとして、駆け出そうとすると隣から手を掴まれる。

「ここは、俺のチャンスタイムだ！！絶対に行かせない！！」

「意味わかんねえよ」

「いや、分からぬんでいいんでとりあえず、僕と二人で・・・帰

「きもいわ

「缶ジュースおじるんで」

「よかのい」

千夏も、もう16歳になる。一人でお家にも帰れるでしょう。

そうして、僕は立花先輩でも千夏でもなく、コーラを選びました。

次の日、千夏は俺を全力で避けた。立花先輩は俺に全力で攻めて來た。

「おー、千夏……どうして俺を避けるーー？」

「別に、避けてないもん」

「いや、おこちよつとまじーーー。」

「あつ・・・・・英一郎君・・・・・。」

立花先輩、登場。一気に不機嫌になる、千夏。

「あの・・・・・これ・・・・・お弁当作つてきたんだけど・・・・・何時も、英一郎君、学食だよね？」

「こやまあ、そりつすけど・・・・・

なんだ、知つてゐるんだもん。

「つーーよかつたじやないーーお弁当ももりだでーーー。」

いきなり興奮して、どこかに行き出す千夏。

「うー今は俺に任せせておけええええーーー。」

しゃしゃつ出る田中部。ていうかお前、いたんだ。

「彼もそつ言つてゐるし、よかつたら一緒に・・・ご飯いいかな？」

「まあ・・・、俺でよければよろこんで」

千夏には、後で謝つておけばよからう。日下部が、全力で追いかけ
てるし大丈夫だよね。

俺は、立花先輩とお昼を選択した。

美味しそうな匂いに、俺は勝てなかつた。

中編（後書き）

読んで頂きありがとうございます。
次話で1部完了となります。

「先輩は、どうして俺のことを知ってるんですか？」

至極当然の疑問。

「俺は、学校ですし、先輩を見覚えはあるかもしないけれど、何か話したりした覚えは無いです」

あ、この卵焼きすごい美味しい。

「うん・・・そうだろうな。英一郎君が私にしてくれたのは、きっと通りすがりの優しさだけ。私には、とっても大事な優しさだったの。」

何時から俺は、そんな優しさを振りまくような人になつたのだろうか。

「いや、本当に分からんんですけど・・・」

「ひみつっーですっー・・・乙女の秘密は堅いんですー！」

「そうですか・・・」

乙女の秘密とか言わると気になるけど、聞かづらっこ。あ、この唐揚げもおいしいな。

「お弁当のそつ様でした、ちょっと俺用事があるんで

「千夏ちゃんこのどいじゅへ。」

乙女の直感なのだらうか。恐怖です。

「千夏ちゃんの」と、好きなのかな・・・やつぱつ。

「・・・こや、別にそんな訳じゃないんですけど、このままだとなんか落ち着かないじゃないですか。ちょっと行つてきまーす」

英一郎は別れを告げて、駆け出した。

残された少女はつぶやく。

「やつこつのが・・・すきって事じゃないのかなあ・・・。でも・・・、告白した私のほうが一歩も一歩も近づいたから・・・負けないよーー」

結局、昼休みに千夏は見つからなかつた。今流行のトイレでご飯なのだからうか。

休み時間もすべて、回避される始末。

「待てえええええーーー。」

全力で、下校しようとする、千夏を追いかける。

追いかけるが、千夏早いなあおい、中学校陸上で入賞は飾りじゃな

かつたのか。

「くそつ・・・ーー！追いつけないーー！」

「俺に任せろおおおおーーー。」

日下部！！いたのか！！

見る見る距離を縮める田下部、あゝという間に千夏の手を掴む。

田下部・・・お前、足めちやくちやく遠いんだな・・・

ふ、せ、ち、な、い、か、俺を、わざと、

別にさけで……なしもん」

あれだけ走ったのは、脳活量は全然違へぬじい

「うー、俺はー、お前と何時もどおりパン屋に行かないとなー、落ち着かないんだよ。」

「えつ・・・・、それつて・・・・」

「ああ・・・・」

3人の時間が、一瞬止まる。

「俺はな、クロワッサンも案外好きらしい。」

千夏にグーで殴られた。思いつきり。

「 もうばかっーー。」

空氣と化していた日下部を振りほどいて、歩き出す千夏。

「 おー、待つてーー。」

「 そうです。英一郎君、待つてください。」

立花先輩・・・、俺の回は既に者なのか・・・？

「 一緒に・・・帰りましょー。」

「 いやです、お断りします」

戻ってきた千夏が俺の手を引きながら、毒を吐く。

「 私は・・・、英一郎君に聞いてるんです。」

空いてるもう片方の手を、立花先輩が握りながら歩く。

日下部が少し後ろで、叫んでいる。

「 俺の怒りがあああーー有頂天うつうひひひーー。」

それ、ぱくっ。

夕暮れ、今日も、昨日より一枚の層を重ねた。

明日はきっと、明後日はきっと、一枚、もう一枚と、
積み重ねていく僕らの日々、それはきっと、
いつなるまで気付けなかったけど、まるで・・・ね。

初めましてなほほほほーん、ワンドーフォレストです。
一部は、このお話でおしまいです。いかがだったでしょうか?
二部は、また別のお話となります。
社会人の一人を巡るお話となります。
ぜひ読んでやってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0932y/>

クロワッサンみたいな日々～夏～

2011年11月17日19時14分発行